古書販売目録にみる葛飾北斎

● はじめに

古書販売目録は、古書店の商品紹介カタログで、本だけでなく浮世絵や工芸品などの美術作品も掲載されています。一時的な利用を目的とする性質上、長期間保存されることは少ないですが、過去の目録からは、古書や美術品の流通や値段の変遷など、さまざまな情報や手がかりを得ることができます。

江戸時代の中期から後期にかけて活躍した浮世絵師、葛飾北斎(かつしかほくさい)の画業をたどりながら、北斎作品が掲載された古書販売目録などを紹介します。

北斎の肖像

福田和夫『北斎と印象派・立体派の人々』(昭森社、1956 年)より

千代田図書館所蔵
資料ID:102404027

● 葛飾北斎について

葛飾北斎(1760 年-1849 年)は下総国本所割下水(現在の東京都墨田区亀沢)に 生まれたとされます。

6 歳のころから作画に興味を持ち、19 歳で浮世絵師・勝川春章に弟子入りしますが、兄弟子との衝突が原因で破門されてしまいます。

勝川派を離れた後の北斎は、読本挿絵(小説の挿絵)、絵手本(絵の指南書)、風景版画を量産し、独自の画風を築きあげていきました。晩年は古典や宗教を題材にした肉筆画の制作に熱中しました。

93 回も引越しをするなどの奇行が知られる北斎ですが、公衆の面前で 120 畳もの達磨の図を即興で描くなど、絵師としての能力をアピールするしたたかさも持っていました。

生涯にわたり、森羅万象を描くことへのすさまじいまでの情熱を持ち続け、死の直前にあっても、
「あと 10 年、いや、あと 5 年生きることができれば、真の絵師となれるのになあ」
と嘆き、息絶えたとされています。

高力種信『北斎大画即書細図』(1817 年)

名古屋に滞在していた北斎は、自分の技術を世に知らしめるために、屋外で大達磨を描くイベントを行いました。

『北斎大画即書細図』の著者である高力種信は、たまたまこのセンセーショナルな見世物を目の当たりにし、その様子を絵本に綴りました。

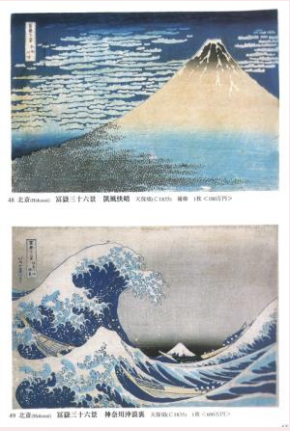
高力種信『北斎大画即書細図』(1817 年)

大阪府古書籍商業協同組合
『和洋古書籍展観入札大会目録』(1977 年)より

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」

● 北斎の代表作品

『冨嶽三十六景』(1831 年-1835 年頃)
は、北斎の最も有名な作品の一つです。中でも、「神奈川沖浪裏」と「凱風快晴」は外国でもよく知られています。特に「浪裏」は日本文化が世界を席巻するイメージとして、たびたび目にすることができます。



葛飾北斎『冨嶽三十六景』
「凱風快晴」、「神奈川沖浪裏」
日本浮世絵商協同組合『日本浮世絵大入札会』(2003 年)より
千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」

● 馬琴との共同作品

馬琴肖像
和田萬吉『馬琴日記』
(丙午出版社、1924 年)より
千代田図書館所蔵
資料ID:102676897

北斎は 40 代の頃、当時流行していた読本小説の挿絵に集中するようになります。北斎は『南総里見八犬伝』で有名な曲亭馬琴と交流を深め、彼の作品の挿絵を多く手がけるようになりました。

馬琴は江戸の読本を発展させた立役者でした。彼が書く勧善懲悪や因果応報の世界は、北斎の描きたい題材に近いものであったようです。

彼らの共同作品『椿説弓張月』(ちんせつゆみはりづき、1807 年-1811 年、全 29 冊)の挿絵には、北斎が得意とした生き物のような波の表現を見ることができます。

しかし、馬琴との蜜月は続かず、後に絶交したといわれています。

曲亭馬琴『椿説弓張月』
一誠堂書店『一誠堂古書目録』(1991 年)より
千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」

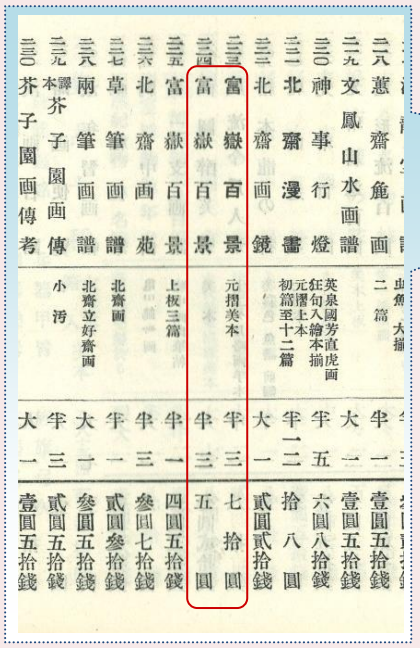
● 彫師へのこだわり

絵師が描いたデザイン(版下絵)を版木に彫るのが彫師です。完成した線は彫師の腕に左右されるので、絵師が自ら彫師を指名する場合もあったようです。北斎は『富嶽百景』(1834 年-1835 年頃)出版の際、江川留吉という当代随一の彫師を指名しました。どの彫師が作品に携わったかによって、浮世絵に付けられる値段

も変わったようです。

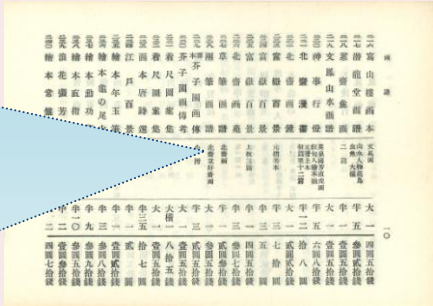
版木が彫られて初期の頃に摺られた浮世絵を初摺（しょずり）といいます。初摺は絵師と彫師が立ち会いのもと摺られ、絵師の望み通りの線になるまで、厳格に修正が繰り返されます。このように丹念に作られた初摺は、長い年月が経って色褪せても、高い評価を受ける傾向にあります。

それに対し、摺りを重ねたものを後摺（あとずり）といいます。後摺は絵師の手を離れ、異なる色で摺られる場合があります。また版木がすり減るため、最初の線と大分異なってしまいます。そのため初摺よりも価値が低くなる傾向にあります。



『富嶽百景』の備考に、「元摺（初摺）」、「美本」とあるものは、そうでないものと比べて非常に高い値がつけられています。

【参考】1937 年の国家公務員の初任給は月俸 75 円



大屋書房『大屋書房古典籍目録』（1931 年）より
千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」

● 版元・蔦谷重三郎

「蔦谷重三郎」店先の図
葛飾北斎『画本東都遊』（1802 年）より
大屋書房所蔵

浮世絵は、まず版元が企画を立て、それに沿って絵師が描き、彫師が彫り、摺師が摺り上げることで完成します。浮世絵の制作には版元の意向が強く反映されます。

版元の一人、蔦谷重三郎は、東洲斎写楽、喜多川歌麿など、才能ある絵師を数多く発掘しました。しかし寛政の改革以後、出版物への監視が厳しくなるにつれ経営は苦しくなり、精神的にも追い詰められた蔦谷は、48 歳で死去しました。

出版という枠を超えて文化の創造に貢献した蔦谷の功績は、高く評価されています。

『潮来絶句集』発禁の解説ページ
一誠堂書店『一誠堂書店創業 100 周年記念　古典籍善本展示即売会目録』（2003 年）より
千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」

● 北斎作品の贋作

北斎の作品と称される偽物は非常に多く作られたと言われています。 特に一点物の肉筆画は版画よりも真贋がつきにくいため、贋作の量が多かったようです。

昭和 1934 年、ある入札展覧会で、多くの出品物が偽物の肉筆画であることが判明しました（春峯庵事件）。犯人は全員逮捕され、出品目録に推薦文を書いた学者は、浮世絵の研究から引退しました。またこの事件をきっかけに、多くの古書店が肉筆画の取扱いを敬遠するようになりました。

贋作のリスクが高く、質を見極めるには高い専門性も求められる肉筆画は、まとまった数量を長期にわたり扱うという意味では、特定の古書店に集中する傾向があります。

古美術商･古書店など業者向けの目録

左：表紙　　右：北斎作と偽られた屏風絵

『春峯庵華賓集』（川部商会、1934 年）より　大屋書房所蔵

贋作浮世絵展覧会の目録

1934 年に行われたこの入札展覧会は大掛かりなものだったので、古美術商・古書店など業者向けに配布された目録（写真・上）の他、一般向けの目録（写真・右）も作られました。内容はほぼ同じですが、一般向けの目録には、別冊の解説書が付いています。

一般向け目録の表紙

『春峯庵什襲浮世絵入札展観図録』

（東京美術倶楽部、1934 年）より

中野書店所蔵

● 高まる北斎の評価

奇抜な構図の風景、生命力に溢れる生き物の描写で一世を風靡した北斎ですが、晩年は歌川広重の人気に押され、決して安泰ではありませんでした。

北斎の作品が芸術として評価され始めたのは、本人の死後、19 世紀後半のフランスにおいてでした。海外の北斎人気が高まるにつれ、浮世絵を買い付けて海外へ輸出する店が現れ始めました。また、北斎の研究が国内でも進められるようになりました。

21 世紀の今でも北斎の評価は衰えることなく、日本を代表する芸術家の一人として、世界で高く評価されています。

吉澤商店と『古代錦絵江戸絵又絵紙買入概價表』

吉澤商店は、貿易商・河村謙一が創業した会社です。後に映写機を導入し、日本最古の映画会社の一つとなりますが、それ以前は錦絵や郵便切手を輸出して利益を上げていました。

ここで展示している『古代錦絵江戸絵又絵紙買入概價表』は、浮世絵を店側が買い入れる際の基準が書かれた目録です。そこには、浮世絵を持ち込む一般人にもよくわかるように、各浮世絵師の買い取り基準のほか、様々な条件が記載されています。

北斎作品の買い取り基準が書かれています。

左上:表紙　左下:背表紙　右:北斎作品の解説ページ

『古代錦絵江戸絵又絵紙買入概價表』
(吉澤商店輸出部、1917 年)より　　千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」

〈場所〉千代田図書館 9F ミニ展示コーナー
〈期間〉2010 年 1 月 25 日(月)～3 月 27 日(土)
〈主催〉千代田図書館
〈協力〉大屋書房、中野書店

本資料は展示の内容をもとに作成しました。

無断転載はご遠慮ください。